父の戦記

父の戦記

週刊朝日編

朝日新聞社

父の戦記

定価三二〇円

昭和四十年十二月十日発行
編　者　週刊
発行者　足
印刷所　明善印
発行所　朝日新
東京
大阪

© 朝日新聞社　一九

目

次

大陸

戦陣訓は許すことなし 11
閉ざされた少年の眸 15
コレラ地帯行軍記 19
暗夜に消えた工作員 24
挺身奇襲隊の風船旅行 28
「礼栓」とともに 32
火柱は海を染めた 35
没法子な牛のはなし 39
護送列車から暁の脱出 43
吹雪の中の花嫁行列 47
高粱畑で遇った敵 50
朱村日本語学校 54
老婆子の愛の饅頭 58
老頭児は再び帰らず 63
赤とんぼを餞けに 67

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

青春を賭けた戦いの傷 71
マンドリンの火は噴いた 75
真昼の丘での処刑 78
三度泣いた「太郎」 81
落日下の最後の中隊 85

北　方

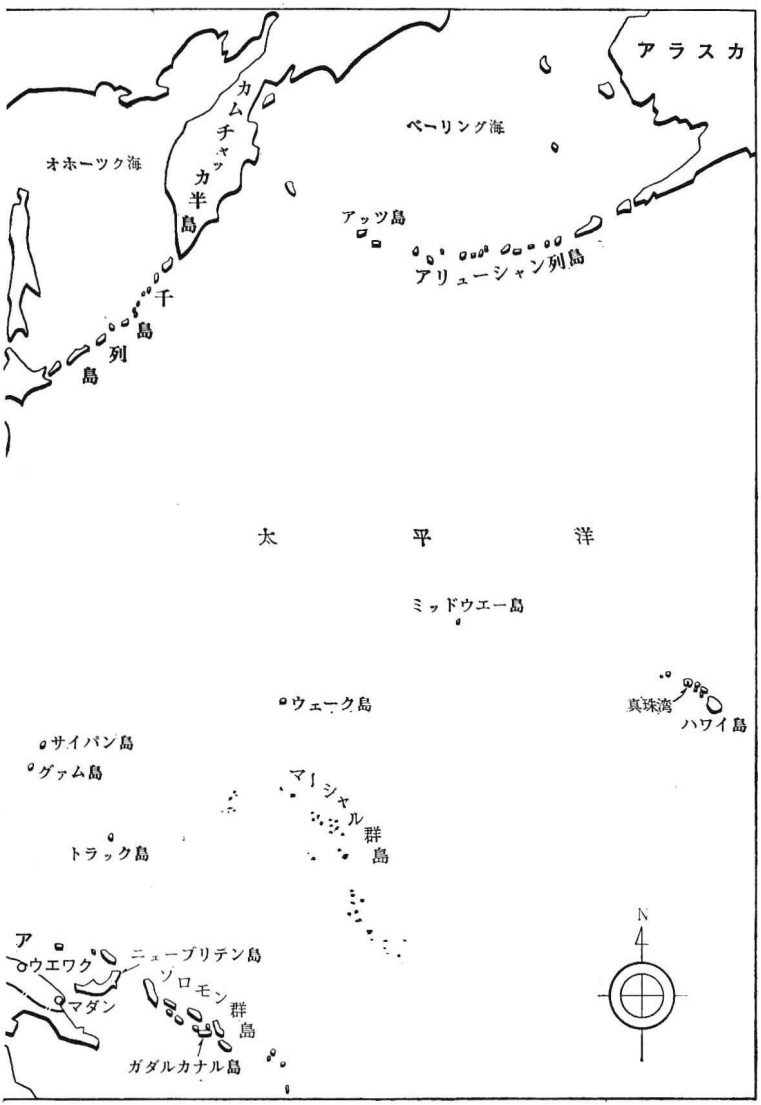
橋本少尉のこと 90
私が失った右眼の話 94
ある赤軍将校の友情 97

南　方

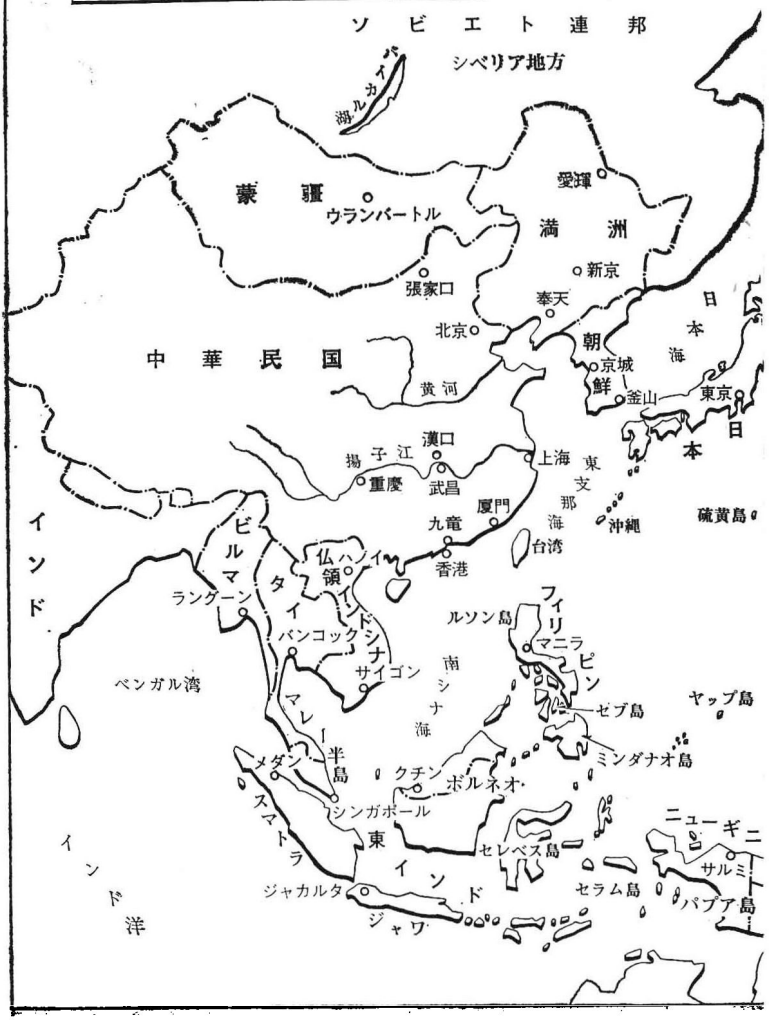
一切れのハムの後味 101
ジャングルの中の死 105
パプアと歌ったドレミファ 109
逃亡兵と少年兵補 113

投　降　117
狂人と南瓜の蔓　121
病院船、沈みつつあり　125
三笠山の仏法僧　129
密林に埋もれた戦記　133
南海の日没に友を葬う　137
トッケーは五つ鳴いた　141
三匹のエビとタロイモ　145
水をあさる狂気の群　149
生きて還った〝生ける屍〟　152
死刑囚が残した手帳　156
青酸カリで自決した人々　160
四人の捕虜とスプーン　164
禿鷹の道は遠し　168
ジャングルの友情　172
ハワイ攻撃の日記から　176

内地・沖縄
帰らざる急降下 180
烈日にさらされた爆撃の跡 184
「偉大なる王者」を胸に 188
人われを軍の走狗と呼ぶ 192
空腹でみた藁火の色 196
白い珊瑚と少年の死 200
野を紅に染めて…… 204
あとがき 209
付図 太平洋戦争当時の略図


アラスカ
カムチャッカ半島
ベーリング海
オホーツク海
アッツ島
アリューシャン列島
千島列島
太平洋
ミッドウエー島
ウェーク島
真珠湾
ハワイ島
サイパン島
グァム島
マーシャル群島
トラック島
N
ア
ウエワク
ニューブリテン島
ソロモン群島
マダン
ガダルカナル島

太平洋戦争当時の略図


ソビエト連邦
シベリア地方
バイカル湖
蒙疆
ウランバートル
愛輝
満洲
新京
張家口
奉天
北京
中華民国
黄河
朝鮮
京城
釜山
東京
日本海
日本
漢口
揚子江
重慶
武昌
上海
東支那海
厦門
九竜
香港
台湾
沖縄
硫黄島
インド
ビルマ
ラングーン
タイ
仏領インドシナ
ハノイ
バンコック
サイゴン
南シナ海
ベンガル湾
マレー半島
メダン
スマトラ
シンガポール
クチン
ボルネオ
フィリピン
ルソン島
マニラ
セブ島
ミンダナオ島
ヤップ島
セレベス島
セラム島
ニューギニア
サルミ
パプア島
東インド
ジャカルタ
ジャワ
インド洋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

父の戦記

〈北支〉

戦陣訓は許すことなし

平野正巳

昭和十六年、私たちの部隊は、北支那山東省の南西、河南省との省境に駐屯していた。川一つへだてた対岸は、共産第八路軍の政治工作の行届いた部落であって、わが部隊の動向は、たえず敵側につつぬけになっていた。

私は部隊の主計として、糧秣、給与、酒保などを受けもっていたが、炊事係の兵隊に召集兵の鈴木一等兵がいた。炊事には人夫として、李、王、方の三人の現地人がいた。ともに二十歳ぐらいの青年であったが、私たちは便宜上、背の高い李を太郎と呼び、以下、二郎、三郎と日本名で呼んでいた。中でも太郎は主人（鈴木一等兵）思いで、行動は常に正しく、正義と人間愛に燃える青年であった。三人の中で一番教養もあり、日本語もよく理解していた。

酷暑の八月、部隊は敵の一隊が対岸より十キロ離れた部落に集結していることを情報で知り、鈴木一等兵も急遽戦列に加わり、夜襲を敢行すべく出動して行った。

敵は予想外の、われに十数倍する大部隊であり、わが方は数多くの戦死者と行方不明一名を出す大激戦であった。その行方不明が鈴木一等兵であった。

鈴木一等兵は戦死したのかも知れない。しかし死体がない以上、行方不明として処理しなければならない。行方不明であっても、捕虜にはならないで、きっと戦死しているだろう。これが部隊幹部の希望的憶測であった。

鈴木一等兵の行方不明を知った太郎は、声をあげて泣いた。炊事下士官に、早く救出してくれと嘆願し、私のところにも「何とかして、日本兵全部で探し出してくれ」といって来た。

「鈴木大人には妻も子供もいる。その妻と子供のために探すべきでないか」と、しまいには私にくいつくような始末だった。私には兵を動かす指揮権はない。しかし、太郎の言葉が胸に強く響いたので、部隊長に進言した。

「太郎よ、私も小さくして父を失った。父のない子の悲しさは誰よりも私が一番よく知っている。だけれど、部隊長は兵隊を出すことを許可してくれない。だからあきらめてくれ」

と言うと、太郎は悲しい顔をしていた。太郎の国境を越

えた人間愛に打たれて、私は思わず涙を流した。
太郎の父は県庁の要人であったが、共産軍に殺されたとのことであった。太郎が日本軍に入ったのも、何かそこに原因があったのだろうし、鈴木一等兵の子供に、父を失った悲しみを味わわせてはならないという人間愛も、己れの体験に根ざした真実の叫びであったのだろう。
「太郎よ、鈴木がいなくたって、鈴木の妻や子供は手厚い国家の保護を受けて、不自由なく暮せるのだから安心してくれ」
私の言葉を聞く太郎の目から涙がこぼれ落ちていた。
「平野大人、この金を鈴木大人の家族に送ってくれ」と、太郎は大切にしまっていた三十円を私の目の前に差出した。
太郎の月給はたった三円である。炊事場の片隅に寝泊りして貯めたとはいえ、彼らの三十円は苦力(クリー)として妻一人買える金額である。いつの日か妻を持ち、家庭を築きたいと、血と汗と涙で貯めた貴い金である。私は太郎の善意を断ったが、太郎も頑としてきかなかった。「太郎よ、ありがとう」私は声がつまって後の言葉が続かなかった。
二郎も三郎も少しではあったが金を出した。私は部隊長室に太郎を連れて行った。部隊長も涙を流して太郎たちの貴い金を受取り、礼を言った。
この時の太郎は、鈴木一等兵をさがしてくれない憎しみの感情からなのだろうか、敵意を持った目で部隊長を見ていた。部隊長の言葉が終ると、太郎はハッキリとした日本語で「バカ野郎」といって逃げるように去り、そのまま、部隊から姿を消して行った。
太郎が去って十二日目の夕方、突然、二郎が私の部屋に来た。太郎が「ぜひ会いたい」といっているから来てくれとのことだった。
薄暗い炊事場の裏に太郎が立っていた。
平家荘(ピンチャシャン)と言う部落に鈴木一等兵は捕虜になっている。大腿部骨折の貫通銃創を受けて、共産軍の手厚い看護を受けている。敵の主力部隊はすでに移動して、十二、三人の敵兵の監視の中で治療している。二郎たち三人で救出に行ってくるから鉄砲を貸してくれ……とのことだった。
私はびっくりした。生きているのは嬉しいことであるが、捕虜になっているのは悲しいことである。部隊長に話せば直ちに救出するであろうが、捕虜になった以上、せっかく帰って来ても、軍法会議で銃殺刑にされるのは必至である。戦死であるならば、鈴木一等兵の家族は靖国の妻として、子として、周囲から暖かく迎えられるだ

ろうが、銃殺刑に処せられた夫の遺骨を受取った妻の悲しみはいかばかりか、それを考えるとどうすることも出来ない。

日本軍隊には、捕虜になったら死ね……と言う戦陣訓がある。死ぬことが国家の至上命令なのである。

私は迷った。しかし、太郎の必死の涙の嘆願で私の腹は決った。部隊長に黙って、私一人が救出に行こう。私は自分の拳銃を太郎に渡し、二郎と三郎に手榴弾を、私は兵隊の鉄砲を借りて布で巻き、支那服を着て兵営を脱出した。

平家荘は三十戸に足りぬ部落である。救出作戦はすべて太郎のいう通りにした。途中の部落を通過する時、太郎は適当なことを住民にいって、ようやく平家荘にたどりついた。

太郎と二郎は敵の詰所（衛兵所）でしばらく話をしていたが、難なく通り過ぎた。私と三郎は詰所の裏の草ムラの中にひそんだ。太郎の拳銃の音とともに行動を起す作戦だった。十分もたったころ拳銃の音がした。私と三郎は詰所に手榴弾を投げ込み、逃げる敵兵に銃弾を浴びせた。

救出にかけつけた私を見て鈴木一等兵は、

「申しわけありません」

といって泣いた。足には副木をあててあり、目は落ちくぼんで、顔はやつれ果てていた。

体の大きい太郎は、鈴木一等兵を背負って高粱畑（コーリャン）の中を走って行った。私たちは太郎が安全地帯に逃がれるまで応戦した。

夜の明けきらぬ内に部隊にたどりつき、鈴木一等兵を炊事当番室に寝かせた。

「鈴木、お前は捕虜ではない。重傷で動けなくなっていたのを親切な民家の人が助け、私たちが収容したことにする。だから決して捕虜になったのではない。従って軍法会議にもかけられない。お前は病院に収容され、名誉ある戦傷者として内地に送還されるのだ。安心してくれ」

事実を知っているのは私だけである。私はウソをあくまでも通して助けるつもりでいた。

まだ起床ラッパまで二時間もある。私は自分の部屋に戻った。部隊長にどんなふうに報告しようかと考えていた。

五時二十分、爆発音が窓ガラスを響かせた。胸騒ぎを押えて炊事場に走った。鈴木一等兵はウツ伏せになり、腹に手榴弾をあてて自決したのだった。腸がちぎれ飛び手首が血の海の中に転がっていた。

――捕虜になって申しわけありません――たったこれだけの遺書であった。

せっかくここまで連れて来たのに……太郎は死体に取りすがって泣いていた。やがて部隊長が来た。私は詳細に部隊長に報告した。

「鈴木、よく死んでくれた。武人の花である」とほめたたえ、ニコニコしながら副官に、「行方不明を戦死と訂正するよう」師団司令部に電報を打てと命令した。

これを聞いていた太郎は、「共産軍でさえ手厚い看護をしてやっていたのに、なぜ部隊長は喜ぶのだ」と言った。私は黙っていた。この理由を話しても太郎たちに分るはずがない。

やがて太郎は部隊長に向って「東洋鬼(トンヤンキー)」と叫び、私に向って「平野大人再見(さようなら)」と言って出て行った。そして二度と再び帰ってこなかった。

――恥を知る者は強し。生きて虜囚(りょしゅう)の辱(はずかし)めを受けず、死して罪科の汚名を残すことなかれ――

戦陣訓のこの一節は氷のごとく冷たく、一片の人間愛もなかった。二十八歳の鈴木一等兵は、このために自らの命を断ったのだった。

太平洋戦争では二百五十万の若き命が、アッツ、サイパンなどに玉砕し、ニューギニア、ビルマなどでは食糧のない餓鬼地獄の中で散って行った。食糧、弾薬が尽きたなら、すでに戦いの責任は果したはずだ。降伏さえすれば、どのくらいの貴い命が助かったことであろうか。

そして現在、よき父、よき夫として暖かい家庭の中に生きていることであろうか。

思えば、この戦陣訓は憎みてもあまりあり、本人はもとより、遺族にとっても、痛恨きわまりなきものであった。

いったい、だれがこの戦陣訓をつくったのだ。そしてこれを全軍に布告した者こそ、太郎のいう人命の貴さ、人間愛を知らぬ東洋鬼である。

昭和十七年、日本は太平洋戦争の勝利に明け暮れていた。しかしそれとは逆に、われわれの部隊は激しい敵の攻撃を受け、多くの犠牲者を出していた。

東洋鬼と叫んで去って行った太郎は、そのころ共産第八路軍の若き中隊長となっていた。そして豪胆、沈着、神出鬼没、東洋鬼を撲滅せよと、日本軍に激しい攻撃をかけていたのだった。

あれから二十五年、現在、太郎が生きていれば、きっと中華人民共和国の大幹部になっていることであろう。

そして火の玉のごとき正義感と、あの人間愛を持って、真に民衆のために働いていることであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.